

都市造営家豊臣秀吉の合理性観念に関する研究*

A Study on the Rationality Concept of Urban Builder 'TOYOTOIMI HIDEYOSHI'*

岩崎義一**・三国宣仁***

By Yoshikazu IWASAKI**・Norihito MIKUNI***

1. はじめに

秀吉は、強大な宗教勢力を殲滅し支配下に置くという信長の宗教政策を継承しつつも、自己の権力を天皇や神仏を活用して権威付けし、都市造営に活用するなどの措置を積極的に進めた。代表的な例としては、顕如・教如に対する本願寺再興の許可と都市建設、有力寺社への領地の保障、比叡山復興の理解と協力、天皇家への莫大な献金と宮殿の造営・寄進などが挙げられる。武力による宗教への打撃と統制支配を通して、都市建設への活用を図るという秀吉の政策が、いかなる思想や判断によるものか定かではない。秀吉は、心変わりしが激しく栄誉と名声を求め狡猾で抜け目ない性格であり、神仏を軽蔑・嘲笑し宗派の教えを欺瞞と考え何の信仰も信心も有していないなどの指摘もある。秀吉が農民を徹底的に痛めつけ、また悲慘な朝鮮侵略を行ったことなどを考えると、こうした指摘も肯定できるが、しかし、こういった性格保持者秀吉が近代以降にまで影響を与えてきている近世の中央集権的封建制と城下都市の原型を形作った、という事実をすんなりと受け入れることは難しい。秀吉の朝鮮出兵が明治期の軍国主義下で美化され侵略戦争に国民をかり出す道具となったことなどを考えると、秀吉の為政を偉業として捉え直そうとする姿勢は危険ではあるが、しかし明らかに時代転換の大きなモーメントとなったことは事実であり、恐らくこれを可能たらしめる徹底した合理性観念が存在したものと考えられる。本稿は、秀吉の合理性観念の存在理由について考察する。

*キーワード：土木史、豊臣秀吉、合理性観念

**正員、博(工)、大阪工業大学工学部都市デザイン工学科
(大阪市旭区大宮 5-16-1、TEL06-6954-4153、
FAX06-6957-2131)

***学正員、大阪工業大学大学院都市デザイン工学専攻
(大阪市旭区大宮 5-16-1 TEL06-6952-1560、
FAX06-6957-2131)

2. 合理性観念の諸側面

秀吉が権力を握る頃までの社会は、戦国時代の領土獲得合戦と浄土真宗をはじめとする諸教団の台頭等により土地所有関係が乱れており、また貨幣経済の浸透に伴う産業の拡大や都市発展に不可欠な流通機能に対して既往の座は制度疲労を起こしていた。一方で商品経済の発展と共に自治都市が発生し、諸矛盾を強く感じ取った戦国大名は益々闘争を激化させ、農民は浄土真宗の浸透と共に一揆を繰り返すなど、この時代の動揺は大きかった。こうした中で、国を統一して権力を掌握し、商品経済の進展を見据えた、新たな封建制の再構築が時代要請として存在しており、秀吉の合理性観念はこの時代潮流が大きく関わったものと思われる。

また秀吉は、城下町優遇政策 13 箇条など都市優遇政策を進め、刀狩りや身分法令を定めて兵農分離の実施とともに農民の都市移住を禁止する一方で商工業者の都市移住を促進することにより商農分離を図り、都市と農村の分離を行った。¹⁾こうした政策の展開は、生来より信長が持っていた奇抜ともいえる合理的な考え方に倣い迎合した思想・行動を継承したものも多く、具体的な成果を残していった。主要な政策のうち刀狩りについては、紀伊雑賀攻めの経験から(このとき対戦相手の土豪は斬首となり、農民は貴重な生産者層という考えから帰郷させた)、在地の権力者土豪層の存在を断ち切る必要に迫られており、土豪層の否定と百姓の温存のため、百姓の武具所持否定が主たる理由であった。さらにこれが百姓の武士への身分上昇の禁止(第二の自分を作らないことも含む)に繋がり、兵農商工の身分制へと展開していった。²⁾他方、神仏を軽蔑し嘲笑していたとされる秀吉が、南六波羅の仏院建立を目指した

が、これは国中の名声と好評を獲得し、貴人たちに偉力を周知徹底させ、配下の国に割普請による建設作業を命じて生命・財産の消費で従属せしめ、武器没収（刀狩り）で大仏建立用金属蒐集と地方諸国の勢力を殺ぎ反旗の防止を狙っていた。³⁾ このように、秀吉の合理性観念は多目的解決型政策の効率運用という思想が極めて強かったといえる。

中世の城下町は、城郭と町屋が一体化していないことや戦の際に焼き討ちにされるなど不安定性と脆弱性を有していたため、守護地頭や戦国大名の城下町では管理が厳しくなるとともに各階層の定住が進み、室町後期の諸国では政治だけでなく楽市楽座による自由取引の促進により政治・商業機能を強めていった⁴⁾。こうした城堅固から都市堅固に移行する過程で都市の社会的役割は強まり、政治的経済的集権機能をも持ち、城郭建設と都市建設が軌を同じくするようになった。秀吉は、割普請によって大坂城や京都聚楽第、伏見城建設などの城郭や宮殿の建設を進め、これを核に都市造営を進めた。具体的には、大坂城周囲で諸侯に屋敷づくりを命じ、上方には平野や堺から商人を移住させ、武家屋敷や商人町周辺には寺院を配置して、都市の面的整備を進めた。さらに、大規模で強力な武装宗教集団であった真宗々主顕如を、悪事や裏切り等各種の暴動を起こさせず、本丸から監視できる淀川向こう岸の低地（天満）に居住させ、住居に壁や濠の設置を禁じて、門徒たちの屋敷ができ大きな街を完成させた。⁵⁾ 次に京都では、上京に新都市を造営すべく、二千軒以上の既存家屋を破壊し、この土地を諸侯に分配し屋敷の建設を命じ、周囲を堡壘と濠及び高い城壁で囲み、取り壊した三百あまりの諸宗派の既存寺院等を城壁の近くに再建させた。この時の寺院の扱いは、戦の際に最初に僧侶や寺院に遭遇させることと、庶民との従来の緊密な関係を断ち切ることで目的であった。⁶⁾ また、天満に都市が成立した頃、引き続き顕如に京都の土地を与え、天満と同様の街を建設させ移転させた。これは、全国帰依者の参詣で市や都市を拡大させると共に、顕如を自分の処に留め置くためであった。⁷⁾ さらに、堺や都の商人等や全国諸侯に対して、聚楽第の傍に新たな住宅・屋敷の建設と移住を命じ、市街化の進行を強制した。次に秀吉は、九州に留まった際に、戦で破壊された博多を再建す

べく地所と街路の区割りを行い、仏僧にはもとあった市中でなく市外に寺門建設を命じ、この時、不穏な顕如を同行させることもあった。⁸⁾

このように秀吉の合理性観念は、封建制社会の新たな再構築の要請という時代潮流の渦中にあり、機能的で目的的な所謂合理的な思想と行動が第一義とされる社会に遭遇していたこと、また社会改革の時代であり多目的解決型政策として合理的に実施する必要があったこと、さらに都市の存在が重要になってきた時代であり、ここを舞台に効率的に展開するためには、都市造営において宗教を活用・操作し、各階層の移住と屋敷建設を強制させ、一種の共同体の崩壊と再構築により都市民という準公共性をもちうる層の創出を図る必要があったこと、等の諸側面があったと考えられる。

3．社会変化と宗教に対する合理性観念

武士が台頭し始めた鎌倉時代から安土桃山時代は、村上等のいうウジ社会からイエ社会への交替期にあたる。⁹⁾ この社会変化と共に進行した宗教改革を秀吉はどのように捉えていたのであろうか。

古代農耕集団社会から生じたウジ社会に持ち込まれた律令制と旧仏教は、いずれも外来であり一般大衆には浸透していなかったため、いずれも衰退の途を辿った。この頃に台頭しつつあったイエ社会とその集団は、律令制を社会に浸透させる際の試行錯誤（名主層の台頭や武装化、自治など）の過程で自然発生的に生まれたものであり、一定の思想的・宗教的理念のもとに生じたものではなかった。¹⁰⁾ このためイエ社会は、世俗化しており、思想的・宗教的支柱を持ち得ず、この支柱を後追的に希求する形とならざるを得なかった。¹⁰⁾ 平安末期から南北朝時代における社会体制の地滑り的な変化や飢饉・戦の不安などにより末法思想が蔓延し、一般民衆や殺生を常とする武士は呪術的平安密教から脱し合理的な考え方や行動を希求し、浄土真宗に代表される数々の新仏教や各種の文化が生み出された。領土（荘園等）を實力で獲得していった武士層は、真宗を強く信奉した。真宗の専修念仏では、念仏以外の外道、雑行雑修を認めず一切の多神教的な信仰や呪術を許さない内面的に徹底化したものであった。¹¹⁾ ここには個

を追求するというある種の個人主義的で合理的な要素を含んでいた。真宗は、「王法為本」など調和本意とする東方宗教の流れにあり、個人化には限界があったろうが、しかし武士や農民への浸透は、多寡の程度はあれ、個を前提とし合理性を要求する精神を定着させる要素になったことは間違いない。

何故なら、弱肉強食の戦国時代を生き抜く武士が脱呪術化し世俗的合理主義や能動主義で行動するのは当然の事であり、個を前提とする合理性など思想的・精神的基礎を与える材料としては真宗しか見当たらないからである。真宗が基督教のプロテスタント派に相応するほどの社会改革の意欲や民衆救済の理想を持っていたわけではないが¹²⁾、しかし、イエ型集団が台頭する中で、武士や民衆に宿る集団への忠誠心と個人としての能動主義は、真宗の専修念仏と精神的に共通しており¹³⁾、真宗は合理性など思想的・精神的支柱を内在していたと言えよう。

南北朝以降、畿内・北陸等の農村で育っていた中小名主層は、郷、村ごとに集団を形成し一揆の嚆矢となったが、とくに強力な一向一揆において教義が長期にわたって農民を信仰で結束させたという点で、日本宗教史上、他に例を見ない画期的な運動であったといわれる。¹⁴⁾ 次第に強大な封建勢力となった本願寺教団は、事実上の生き神となって、門徒を完全統制して教団指導層の貴族化をもたらし、一向一揆の巨大エネルギーを、全国制覇を目指す戦国大名の角逐に利用しようとした¹⁵⁾、正親町天皇の即位式で巨費を献じて天皇と結んで法主の権威を更に補強しようとするなど、本来の真宗教義（親鸞・蓮如の時）とは大きく乖離していった。この事が切っ掛けとなって信長・秀吉により破壊され支配下におかれるのである。真宗は、個に基づく合理的思想を基礎にしている点においてはイエ社会と同質であり、このことにより巨大化・暴徒化する本願寺は破壊されたものの、その後の本願寺は道具として扱われ、真宗教義は残すことになり、根源的抹殺を免れ得たのであろう。その理由の一つとして、日本人にとって神は国家宗教であって、殆どの宗教の基調もこの国家宗教を基盤にしていると見なされる中で真宗だけは例外と見なせる要素をもっているが¹⁶⁾、しかし、真宗はイエ社会の精神と同質であり、イエ社会が国格神に繋がるものであれば、ことさら真宗の教義を

破壊する必要も無かったのであろう。

このように、真宗はこれまでにない個を前提として合理性を要求するものであって、武士・農民など庶民社会にその精神定着のための触媒機能をもったといえよう。一見して個と集団とは異なるようにみえるが、例えばイエ集団への忠誠心による個の確立といった双方の同時性が重なっているものであり、よってイエ社会集団と真宗は精神的に共通しており、真宗は合理性に対する思想的支柱を有していた。こうした中で、中小名主に仕える農民の倅として生まれ育った秀吉は、真宗の教義を生活の中で実際に触れ思想として有していたであろう。それ故奢り高ぶる本願寺教団に対して不信感を募らせたに違いない。秀吉は信長の本願寺破壊を継承する中で、真宗と本願寺とは分けて考えており、真宗教義とイエ社会の精神的同一性を強く認識しており、このことが彼の合理性観念の自信をより強めたと考えられる。

4．社会のイデオロギー変化と合理性観念

イエ社会の基本的特性は、村上等により以下に述べる超血縁性、系譜性、機能的階級制、自立性にあると指摘されている。¹⁷⁾ このイエ社会は、先述のようにウジ社会に外来制度（律令制）に対して適応する過程で生じたものであって、基本的には双方の社会におけるイデオロギーに共通性が存在する筈である。

国々の開発や軍事面での機能強化が不可欠であったイエ型集団は、集団の機軸に人材を確保することは極めて重要なことであり、養子制度（超血縁性）はこれを保障する工夫であった。¹⁸⁾ 秀吉は、光秀打倒の際の手柄と信長四男秀勝を養子にしていることを理由に信長と同じ平姓を名乗ったが、これにも限界があり、確たる出自を持たないため源姓を名乗れず將軍になるのを捨てて藤原秀吉と名乗り、近衛前久の「猶子」となって、藤原姓を改めて豊臣姓を名乗った。¹⁹⁾ このこと（ウジ社会の遺制に自らを組み込むこと）ではじめて太政大臣や関白になれたのであるが、ウジ社会には決して見られなかったイエ社会固有の超血縁性を為政者の身分でやってのけたところに秀吉の合理的精神をみることができる。聚楽第の工事を始めたのは、関白としての政庁を新たに京都に築いたものであった。

次に、擬制としてであれ血縁を構成原則とする集団においては、首長→嫡子の直系が高く位置づけられ永遠の存続が集団の目標（系譜性）となっており¹⁸⁾、ウジ社会の遺制である天皇制をイエ社会国家が残してきたという事実を考え併せると、特に秀吉が天皇の猶子として自らを天皇（神）に接ぎ木した動機は、イエ社会に脈打つ系譜性が彼の合理的精神を可能にしたものと考えられる。この片鱗として、秀吉がバテレンに対し「日本は神の国」として活動を禁じたときの思想にもみることができる。ここには、イエ社会の頂点（将軍）に立てないことを大ウジ（関白）化することでイエ社会国家としての系譜性を獲得する超越した合理性の意識をも感じ取れる。

次に、軍事と農耕両面で作業の効率的遂行と規模拡大を追求せざるを得ないイエ社会集団は、ウジ社会以来の築き上げてきた道徳や習慣にみられなかった一つの合理的経営体であり、その組織は機能的階統性を持った集団であった。¹⁸⁾そして日本人は武士道（個人主義的）思想の中でも、個人よりも集団を基本とする思想的行動様式をもっており、このことが割普請等にみられように組織面における合理的効率的手段が応用されイエ社会における秀吉の合理性観念を正統化したと考えられる。

次に、イエ社会集団は、それ自体が他に干渉されない自立した組織集団を基本としており（自立性）、その内部では集団的性向を示す民族のためか機能的階統制の中でも合議制的な緩やかな組織構造を有していたが¹⁸⁾、しかし秀吉（信長も含む）はこの構造に強く抵抗した存在であった。これは、自立性こそがイエ社会における自己の権威を対外的に保障するものであり、日本は神々の国という思想で社会をくり抜き日本的合理化で合理性観念を貫こうとする精神を有していたからであろう。支城破却による一国一城制や転封等による中央集権体制の整備の過程は、その具体的な地域の投影として読みとれよう。

このように秀吉は、猶子という形でウジ社会の遺制に自らを組み込み（超血縁制を実施し）、関白（擬制大ウジ）になることでイエ社会国家を獲得し（系譜性を維持し）、古来よりの日本民族の集団的行動様式を活かして組織的合理化手法を実践し（機能的階統性を具現化し）、日本的合理化の精神をもって集団組織の強化（自立化）を全国レベルで進め

た。ここにはウジ社会からイエ社会への変化の過渡期におけるイデオロギー変化を、秀吉が敏感に見抜き、神国思想と集団性に括られた日本民族の根元的特質を触媒機能として接続したのであり、秀吉の強力な合理性観念を正統化し結晶化したものであった。

5. まとめ

秀吉は、時代潮流のなかで多目的解決型の政策を実施し、宗教の活用と庶民や武士の移植によって都市造営を進めることで、共同体の崩壊と再構築により都市民という準公共性をもちうる層の創出をはかろうと考えていたのではないか。そこには合理性観念が不可欠な要素であった。しかし、社会変化に伴う宗教改革がもたらす大きなエネルギーとの折り合いの付け方はかなり難しいことであり、秀吉は、真宗と本願寺とは分けて考え、真宗教義とイエ社会の精神的同一性を認識することによって、合理性観念の重要性・必要性を再認識したのであろう。そして、社会変化に伴うイデオロギー変化を鋭敏な彼は見抜き、神国思想と集団性に括られた日本民族の根元的特質を触媒機能として接続することで、自分の合理性観念の正統性を現実のものにしたと考えられる。

これを経て、時代はウジ社会が終焉し中央集権的封建社会というイエ社会を本格始動させることとなる。

参考文献

- 1) 脇田 修、「秀吉の経済感覚」、中公新書、p146
- 2) 小和田哲男、「豊臣秀吉」、中公新書、p146
- 3) 松田毅一・川崎桃太共訳、「完訳フロイス 日本史 5」、中公文庫、p37 ~ 38
- 4) 矢崎武夫、「日本都市の発展過程」、弘文堂、p111
- 5) 松田毅一・川崎桃太共訳、「完訳フロイス 日本史 4」、中公文庫、p54 ~ 55
- 6) 松田毅一・川崎桃太共訳、「完訳フロイス 日本史 5」、中公文庫、p111 ~ 178
- 7) 松田毅一・川崎桃太共訳、「完訳フロイス 日本史 5」、中公文庫、p178 ~ 179
- 8) 松田毅一・川崎桃太共訳、「完訳フロイス 日本史 4」、中公文庫、p195 ~ 168
- 9) 村上泰亮・公文俊平、佐藤誠三郎、「文明としてのイエ社会」、中央公論社、p190
- 10) 村上泰亮・公文俊平、佐藤誠三郎、「文明としてのイエ社会」、中央公論社、p308
- 11) 村上重良、「日本宗教事典」、講談社学術文庫、p141
- 12) 森嶋通夫、「なぜ日本は成功したか?」、TBSブリタニカ、p62
- 13) 村上泰亮・公文俊平、佐藤誠三郎、「文明としてのイエ社会」、中央公論社、p114 ~ 117
- 14) 村上重良、「日本宗教事典」、講談社学術文庫、p182
- 15) 村上重良、「日本宗教事典」、講談社学術文庫、p188 ~ 189
- 16) 中村勝己篇、「マックス・ヴェーバーと日本」、みすず書房、p101
- 17) 村上泰亮・公文俊平、佐藤誠三郎、「文明としてのイエ社会」、中央公論社、p223 ~ 224
- 18) 村上泰亮・公文俊平、佐藤誠三郎、「文明としてのイエ社会」、中央公論社、p224 ~ 239
- 19) 小和田哲男、「豊臣秀吉」、中公新書、p 136 ~ 137